



⑥ 織づくり 大きなザルやカゴの場合は、縁を頑丈にするため芯に木を入れます。木はまつすぐなものがよく、篠と同じ時期に切り取り、丸い形に束ねて1年くらい外に置いておきます。

⑦ 編む 手足を使って篠製品を編みあげていきます。製品によって編み方は違い、ザルは篠の表皮が内側に、カゴは表皮が外側になるように編みます。編む前にはヒネを必ず水に浸けておきます。まずは底の部分を編んでいき、編み終えたら、節が角に来ないように注意しながら立ち上げ、側面を編みます。余ったヒネは長さを切りそろえ、折りたんで編み止めし、最後に長いヒネで縁巻きをします。

作り手の高齢化と後継者不足

那須の篠工芸は、平成17年に栃木県の伝統工芸品に指定され、現在、その技を伝承する伝統工芸士として5人が認定されています。昔は、農家の副業として篠工芸品が製作され、昭和45年頃までは、大沢、深堀、池田、一ツ樅、半俵、北条、小島などの地区に200戸ほどの生産農家と20人ほどの専業者がいて、業者が買い付けに来るなど忙しいほどよく売れたといえます。しかし、プラスチック製品や安価な輸入竹製品などに押されて需要が減り、その作り手は大きく減少してしまいました。現在、伝統工芸士のほかにも作り手はいませんが、高齢化が進み、後継者も見つからない状況です。

県伝統工芸士の一人で、篠工芸品の製作に取り組んで40年になるという人見ミツエさん（一ツ樅）は「ひいじいちゃんがいろいろで篠製品を作るのを見て覚えましたが、篠工芸は残していきたいけど、後継者はいません」と話します。

需要が減ったとはいえ、篠製品を販売している道の駅那須高原友愛の森工芸館では一定の需要があるといえます。需要をさらに拡大するためには、那須の篠工芸の良さを広くPRすると同時に、さま

ざまな篠製品を提供するため、伝統の技を受け継ぐ作り手の確保が急がれます。

保存・継承への取り組み

伝統ある那須の篠工芸を知ってもらおうと、公民館主催の篠工芸教室が昨年の夏と秋、那須高原友愛の森工芸館で開催されました。教室に参加した受講者は、初体験の篠工芸に「なかなか思うようにいかない」と悪戦苦闘しながらも、とても楽しそうにメカイやザルの製作に挑戦していました。

講師として指導した県伝統工芸士の平山二三さん（一ツ樅）は「やりたいという人がいれば篠工芸を伝えていきたい。まずは自分で材料が作れるようになってくれれば」と話していました。



篠工芸教室の様子

友愛の森工芸館では、篠製品を展示・販売しているほか、製作体験教室（有料）も実施しています。期間は、4月から11月までで、電話予約が必要です。所要時間は60分〜90分程度で、講師の手ほどきを受けながらかわいらしい花挿しを製作できます。



篠製の花挿し

篠工芸を自ら学ぼうとする動きもあります。製作者の高齢化が進み、このままでは篠工芸が無くなってしまうのではという危機感を感じた有志により「那須の篠工芸研究会」が立ち上げられました。同会では、約10名の会員が、毎月2回、友愛の森工芸館で篠製品の製作活動に取り組む、篠工芸を学んでいます。

那須の伝統工芸品や手作り工芸品の普及振興に取り組む那須町工芸振興会の三森敷会長は「昔から受け継がれてきた『篠工芸』をもっと地元の人達に伝えていきたい。後継者育成が喫緊の課題。ゆくゆくは全町的な保存会を作って、那須の篠工芸を保存・継承していきたい」と意欲を燃やしています。